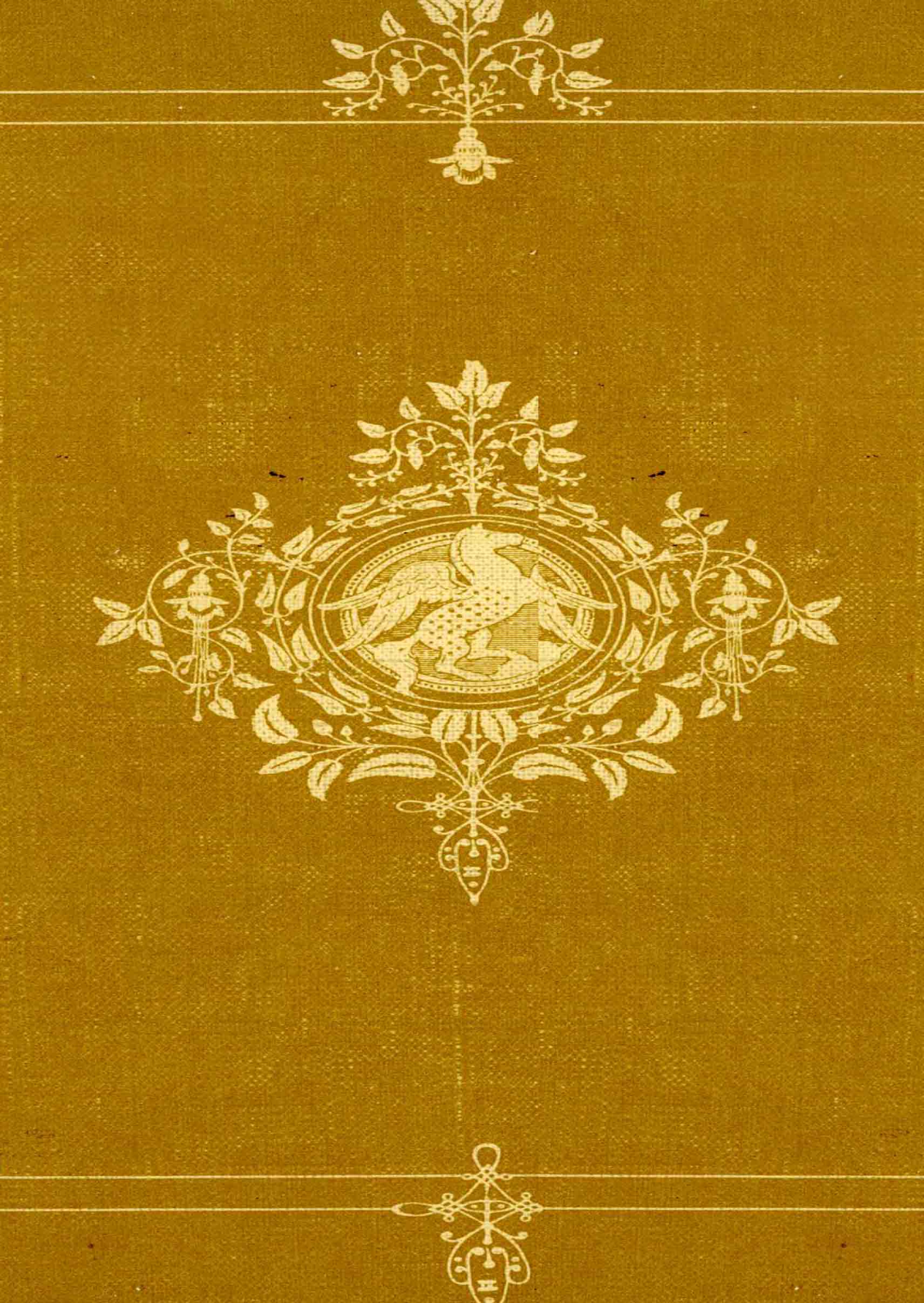

# キリスト教文学の世界

11

# ワイルド
OSCAR WILDE

# スパーク
MURIEL SPARK

主婦の友社

〈筆・訳者紹介〉

曽野綾子　1931年生まれ。作家。
西村孝次　1907年生まれ。明治大学英文科教授。
森　禮子　1928年生まれ。作家、劇作家。
工藤昭雄　1930年生まれ。都立大学教授。

キリスト教文学の世界　11
ワイルド　スパーク
昭和五十二年八月二十五日　第一刷発行
定価一八〇〇円
発行者／石川晴彦
発行所／株式会社主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台一―六
郵便番号　一〇一
振替　東京二―一八〇番
電話　東京（〇三）二九四―一一一一（大代表）
印刷所／大日本印刷株式会社

もし落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

© SHUFUNOTOMO CO., LTD. 1977 Printed in Japan 0398--968397—3062

# 目次

ワイルド
〈解説〉或る個人主義者の内面　曽野綾子　5
獄中記　西村孝次訳　21
人と作品……西村孝次　312
スパーク
〈解説〉自由と悪魔　森禮子　139
独身者　工藤昭雄訳　155
人と作品……工藤昭雄　315

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# ワイルド

〈解説〉

# 或る個人主義者の内面

曽野綾子

オスカー・ワイルドの『獄中記』を文学のジャンルの中で分けるとすれば、これは否応なく「手紙」ということになるだろうと思われる。小説の一形体としてではなく、ごく自然にある人に宛てて書いた手紙が文学的価値を持つ場合は極めて稀であろうと思われるが、ワイルドのこの手紙は稀有な例の一つと言ってよい。別の見方をすれば、これは手紙ではなくてエッセイである。なぜなら、手紙というものは通常相手と書いたものをやり取りするという形をとるのだが、この場合、筆者は獄中にあり、手紙の相手から返事をもらえるような状態でなかった。それにもかかわらず、思いのたけを書き綴るというやり方は、われわれもしばしばするところであるが、それが、これだけの濃密な作品になるところが、ワイルドの非凡さを示している。

しかし、何はともあれ、この『獄中記』が読まれる第一の理由は、非常に卑俗な、それもかなりスキャンダラスな誰かの生活を覗き見したいという情熱のせいであろうと思われる。私も

また、そのような卑俗な興味を全く持たずにこの作品を読んだとは言わない。もっとも、この作品を読んだからと言って、ワイルドがボジーと呼びかけるアルフレッド・ダグラス卿との間の不思議な生活がわかるというわけでもない。彼らがどんな所でどんな夕食をし、どんなばからしい遊びをしたか、ということの片鱗くらいは窺えるが、適切な解説なくしては、このオクスフォード大学の後輩に当たる甘いわがまま息子のアルフレッド・ダグラスとの間に、巷間言われるような男色の影が射していたかなどということは、明確にわかりはしない。

いや、私のような素朴な読者にとっては、当時のワイルドがどれ程時代の寵児であったか、ということさえあまりよく知らないのだから、その点については作者自らがこの作品の中で、およそ日本人的な感覚から言えば耐え難い程の臆面のなさをもって描いている箇所を信ずる他はないであろう。

私は、世間一般の読者というものが、覗き見精神をもって、一つの作品を読むことを、特に悪いとは言わない。それは、自己に対して他者を認識する基本的姿勢である。しかし、それが単に覗き見趣味だけで終るとしたら、それは読者にとっても実りの多い読書とは言えなかったわけだし、そのような程度にしか読者の興味をかきたてられなかった筆者の側からすれば、その作品は不成功だったと言わざるを得ない。

この『獄中記』に描かれている人間関係はそれがイギリスの上流階級のものだとしても、あまりにもわれわれの社会と似ていることがおもしろい。その時代のスターが綿々とくりごとのように述べているのは、自分がぞっこん打ち込んだ友人とその家族の出鱈目ぶりに対する、まことに思い切りの悪い愚痴である。アルフレッドの母親の息子に対する盲愛ぶり、父親と母親と息子の三人誰もが、どこか幼なさを残したままのダグラス家の乱脈さ、そして彼らに困らさ

れながら、どうしても手を切れなかったワイルドの非常な気の弱さなどは、決して特異なものではない。大道具、小道具は十九世紀後半のイギリスの上流家庭のものであっても、人間の葛藤の本質はあまりにもわれわれの周囲に見えるものと同じなので、あっけにとられるのである。

世の中について、私は疎いところがあるからなのかもしれないが、私はついこの間まで、世間には例外というものがあるに違いないと思いたがっていた。つまり、われわれが信じられない程の忍耐強さを持って決して感情の破綻を来たさない人とか、上流階級の暮らしには、私の家に起るような問題はないだろうとか、そういう例外を信じたがっていたのである。勿論、小説を書くために、人間の生きる姿を直視しなければならぬという性癖から、私はこの世に神の如き完璧な人とか悪魔のように残忍な人間がいるとは、あまり信じられなくなっていた。人間というものは、つまり神と悪魔の両極の間にあるものであり、従って不完全、不統一がその特徴であった。しかし片方でそう思いながら、一縷の望みのように、私は地球上には「あり得ないような人間」、或いは「考えられないような人生」があるのではないかと夢見ていたのであった。

しかし恐らくそれが唯一最大の功績と思われるが、文学を読めば読む程（勿論それは良質のものでなければならないが）私は人生はかくも多彩でありながら、似ているものだということに驚いたのであった。今でも新聞などを読むと「鬼畜のような」という表現が、犯罪を犯したり人間的でない行為をした犯罪者に、形容詞としてつけられることがあるが、そのような表現を見ると、私はいつも居心地の悪い思いをした。

第一は、そのようなありふれた無考えな形容詞をつける記者たちの文章に対する神経が信じ

られなかった。第二は、人間は飽くまで人間であって、鬼にも畜生にもなれるわけはなかった。どのような犯罪者でも、その内側をしみじみと見つめれば、そこに必ずや弱い悲しい人間的な面が残る筈である。自分より少し悪い人間は直ちに鬼だと思うような心情は、労わりもなければ思い上がりも激しいものであった。つまり、いいにせよ悪いにせよ、われわれの生活は（金、権力、才能のあるなしにかかわらず）、全く何とも言えない程よく似ているのである。

このような人生に対するなめ方は、確かに私を堕落させもしただろうが、同時に私の視野を拡げてもくれた。だから、ワイルド程の作家が、私のような者から見てさえも愚かしい人間関係を断ち切れなくても、それはまことにあり得ることなのである。そしてこの主題を更に明確にさせるために必要なことは、人間はどんなに愚かな状態にいても、遙かに思想的な高みに達し得るという精神の軽業じみた飛躍をやってのけ得るということなのである。別の言葉で言えば、ワイルドの実生活は何と「愚劣」で、その彼の考えることは何という高みにまで達していることか。この作品の中で繰り返しワイルドが言っていることは、「浅薄こそ最大の悪徳なのだ」（P 22）ということだが、しかし現実のワイルドを知らない者から見れば、彼の実生活こそ浅薄だったように見える。

「神々に嘲られたり傷ものにされたりするような、真に愚かなるものとは、自己を知らぬもののことなのだ」（P 22）と彼自身も言っている。しかし同時に、ワイルドは「神々の目に愚かなるものと人間の目に愚かなるものとは大いに異なる」（P 22）という言い方をしている。私はなぜワイルドがここで、神々という複数形を使ったのか憶測をするだけである。『獄中記』の圧巻は、決してボジーに対する怨みつらみや、或いは断ち切れざる思いではなく、キリストに対する彼の解釈にあるのだから、唯一神たる神以外の複数の神を考える時、それはギリシア



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の神々であろうと、つまりは神と人間との間の中間に位置するものと、私は解釈しようと思っている。この点は、まさに卓越した人間理解の方法であって、私たちは人間という分に応じて他人を嘲笑したり批評したりすることは可能なのだが、それは神の目から見れば茶番劇であって、そのような現状を知ることによってのみ、私たちの精神は本来の意味の人間の尊厳と自由を獲得できるのである。

言葉を変えて言えば、人間関係にまみれるには、逆に人間を越えるものの存在の認識がなければならないのである。逆にそれだからこそ神を持つ人間のみが、最も人間臭い MOYEN DE VIVRE（生き方）を承認できるかもしれない。もし神がなければ、人間はこの世で野放図に「高級」にならなければならないから、自分が人間らしい弱味を持つことなど承認できないし、他人がそうなることも許さなくなる筈である。

「人生のもろもろの致命的な過失は人間が無分別であることによるものではない。無分別な瞬間が人間のもっとも美しい瞬間でもありうるのだから。それらは人間が論理的であることによるのだ」（P 45）という表現には、ワイルド流の修辞学が含まれているとしても、理性によれば総てのものが神なしに解明されると考える人間の単純さを痛烈に批判したものかも知れない。

陛下のレディング監獄なる所がどのような場所であったか、そこに入れられるまでの様々な社会的、心理的経過がどうであったかはこの際別として、ワイルドもまた、この閉ざされた社会で、およそ自由な人間が想像できない苦しみを嘗め、信じられない程の広い魂の世界を体験したのであった。私たちは文句なく自由、家族との語らい、学問をすることの権利、職業を選

ぶことの当然さ等を、人間の魂を創る要素と考えている。しかし往々にして総て整った状態よりも、それらが総て欠落した状況に於て、人間は自分を完成するのである。

ワイルドは、そのことを、決して知識的な面からだけでなく、極めて人情的な到達の仕法で手に入れたのであった。まだボジーが現われる前にワイルドは、ロバート・ロス――十七歳のロスがワイルドに会った時、彼は三十二歳であった――に会うが、彼は、ワイルドの死後、彼の原稿の管理人になったが、ワイルドに「道ならぬ不毛の情熱」の手ほどきをした男でもあると言われている。そのロスを、ワイルドが破産裁判所の廊下で見かける場面の描写は、無責任なボジーに思い知らせるために、ややオーバーに描かれている気味があるが、人の心をうつものがある。

「悲哀のあるところに聖地がある。いつかきみもこのことばの意味を悟るであろう。それを悟るまではきみは人生というものについてなにひとつ知らないであろう。ロビーや、かれみたいな性質のひとなら、それを悟ることができる。ふたりの警官にはさまれてウォンズワース監獄から破産裁判所へつれ出されたとき、ロビーが長い暗い廊下で待ちうけていたのは、わたしが手錠をかけられ首うなだれてその前を通りすぎると、衆人環視のなかで、わたしに向かってうやうやしく帽子を脱ごうとしてだったけれど、そんなやさしい単純な行為が群衆をしんとさせてしまった。あれよりもささやかなことで天国に召されたひとびともいたのである。この精神において、またこの愛のかたちによって、聖者たちはひざまずいて貧しきものの足を洗い、あるいは身をかがめて癩を病むものの頬にくちづけしたのである。かれのその行為についてわたしはただのひとともかれに語ったことはない。かれの行為にわたしが気づいたことすらかれが知っているかどうか、現在ただいままでよくわからない。それをわたしは自分のこころの宝

庫にしまっておく。とうてい返済できないと思うのがうれしいような秘密の借金としてそこにかくしておく。それは多くの涙という没薬と桂皮の香気で満たされて美しく保たれる。わたしにとって知恵が役に立たず、哲学は不毛で、わたしを慰めようとしたひとびとの格言や名句も口中の塵か灰みたいなものでしかなくなったとき、あのささやかな謙遜なものいわぬ愛のおこないの記憶こそはわたしのためにあらゆる憐れみの泉の堰を切り、砂漠を薔薇のように花咲かせ、孤独な追放者の苦渋からわたしを救い出して、この世の傷ついた、破れた大いなる心と調和させてくれたのである。ロビーの行為がどんなに美しいものだったかということだけでなく、それがわたしにとって、なぜあんなにも大きな意味があったか、そしてつねにあんなにも大きな意味があるのだろうかをきみが理解できるとき、そのときこそ、おそらく、どのように、またどのような精神において、〔きみの詩をわたしに献呈する許しを求めて〕わたしに近づくべきであったかをきみは悟るであろう」（P 59）

ワイルドの自信と、その才能が受けるいわれなき不運について、彼は、それらをやはり総て、自分の力の結集というふうには考えていない。かりにそこには、微かなワイルド流の表現があったとしても「神々はわたしにほとんどあらゆるものを与えてくれた」（P 66）と書いているのである。それはとりもなおさず、彼のもろもろの不徳、失策、性格的欠陥のすべてをも、神の責任に帰したがっているふしがなくもない。事実、それは、或る面では、きわめて正当派的なキリスト教徒の考え方ではないかと思われる。なぜなら人間は、発生の要因としては自己の意志とは別に創られたものであり、しかる後に、自分を創造することを、神の手から、自らに委ねられたものだからである。ワイルドが、その実生活においても不毛の同性愛に悩んだとするなら、宗教もまたワイルドの救いにはならなかった。

「はるかに険しい山を登り、ずっと暗い谷を通りぬけなければならない。しかもその力をすべてわたし自身の中から得なければならない。宗教も、道徳も、また理性も全然わたしを助けることはできない。

道徳はわたしを助けてはくれない。わたしは生まれながらの道徳律廃棄論者（アンティノミアン）なのだ。わたしは法則のためでなく、例外のために作られた人間のひとりなのだ。しかし人間の行為には悪いものはひとつもないと思う反面、人間の生成にはなにか悪いところがあると思う。それを学んだことは幸いである。

宗教もわたしを助けてはくれない。ほかのひとびとが目に見えぬものに捧げる信仰を、わたしは手に触れることができ、眺めることのできるものに捧げる」（P 69）

人間のすることに一つとして悪事はないと思う、という言葉は反宗教的でありながら、一面に於ては宗教的な意味を持つ。殺人という行為を仮に考えてみると、それはどう考えても妥当性を認められない行為である。なぜならば、世の中の他の失策はつぐのえることがあり得るが、一旦殺してしまった他人の命だけはどうにも元に戻しようがないからである。それでもなお殺人が百パーセントの悪だと人間皆が思うものだとすることには無理がある。飲んだくれで、博打好きで、女癖が悪く、たえず一家の金を持ち出したり、詐欺を働いたり、社会的な制裁を加えられるような事件を繰り返して起している父親がいたとして、彼が一杯飲んだ挙句に、同じような仲間からケンカの果てに殺されたと考えてみると、その残された家族は救われたような思いになることさえあるのである。勿論その解放感には翳りがないわけではない。死んでしまえば大抵の遺族が「あの人もかわいそうに」と思うものである。私の知人にその父親が死んだら「赤飯を炊く」と言っている人物がいるが、その愛せない父が死んだ時に、たとえ

赤飯を炊いて祝おうとも、自分が人の死に対して赤飯を炊こうと思った、という醜さは終生忘れないだろうと思う。

私は、決してワイルドの良き読者ではないが、彼が言おうとしているのは、恐らくそういうことであろうと考えている。悪事どころか、全くの善意でありながら、ワイルドが言うように、「その人間のあり方がどこか悪い、ということもある」のである。それがキリスト教で言う原罪というものの最も理解し易い形ではないかと思う。私たちは自分が正しければ誰にも迷惑はかけない、というのは間違いなのである。われわれが正しい人間であるからこそ、或いは優しい人間であるからこそ、私たちの周囲の人々はそれに困らされる場合も大いにある。そして恰も、そのような矛盾したものの反対給付のように、ワイルドはキリスト教徒的な人生の味わい方をしようとする。

「これまでわたしの身に起こったあらゆることをわたしにとって正しいものとしなければならない。板の寝床、胸のわるくなるような食物、指先が痛みでしびれて無感覚になるまで荒縄をきれぎれに裂いて槇皮(まいはだ)をつくる作業、日々の明け暮れの賤役、日課のため必要とされるらしい酷薄な命令、悲哀を見るも醜怪なものとするものすごい衣服、沈黙、孤独、屈辱――こうしたものをそれぞれみな霊的な体験へと転ぜしめねばならない。霊魂の聖化へと作り直そうとしてはならぬような肉体の堕落など、ただのひとつもないのである」（P 69）

実際、もし一人のキリスト教徒が、ある程度の心身の強さを与えられたならば、彼は自分の外界の、あらゆる願わしからざる状況をことごとく自分の心を養うものというふうに、考え得るのである。

現在の社会は、周囲が良ければ自分も正しくなれる、という考え方であって、その理論は正

しくないわけでなく、弱い人間としては、周囲が自分を守ってくれることをあてにせざるを得ない。しかし、相手から与えられた状況に比例して反応するという精神は、そもそもキリスト教発生以前のものであって、それは弱肉強食の思想にも連なり、「目には目を」の報復の精神とも通じてしまう。しかも、そのような力関係はあまりにも月並なものであって、人間としては自分に快い状況と同様に、自分にとって快からざる日常の中からも、自分の精神を創り上げる養分を見つけねばならないのである。この考え方の違いの故にこそ、社会主義は「世の中がよくなれば人間もよくなる」という、常に責任を他人に転嫁できる理論を展開し、キリスト教は良く変わることを願いつつも、この地上に完全な社会が出現することなどありえない現実をつきつけ、その未完成の現在の中から人間の尊厳をとり出そうとするのである。

かつて私は、様々な所で、私が『旧約聖書』の「ヨブ記」から深い感銘を受け、それをもとに『無名碑』という作品を書いた経緯を述べた。しかし多くの読者はそれを読んでいられないだろうから、私は今ここで、ごく手短に、その要旨を繰り返さなければならないと思う。私の中の「ヨブ記」は、義人ヨブが神から受けたいわれのない試しに対して、決して神を裏切ることなく、しかもその忠誠の故に、神から報いられることもなく死ぬことなのである。実際の「ヨブ記」は四十二章七節以降の所で、終始神に忠実であったヨブが、最後には神の祝福を受けて報いられるようになっているが、それは勧善懲悪の好きな読者のために後世の福音史家が書き加えた結末であって、本当の「ヨブ記」は、義人ヨブが報いられぬままに死ぬ、というのである。このようなすさまじい現実は、ヨブばかりでなく、私たちの周囲を見回せばいくらでもころがっている。世の中は、決してある人間が為したことに対して、正当に報いない。ある



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com